

英語音声を見直す

—なぜ日本人の英語は通じないか〔Ⅱ〕—

井上 卓

(前号につづく)

3. 考察

3. 1 英語の発声

ネイティブ・スピーカーの話す英語は、一般的に朗々としてよく通る。一方、日本人の話す英語は、弱々しく文末が消えて聞き取りにくい。例えば、スピーチの指導の際、生徒に I went to Kyoto yesterday with my parents. という文を読ませると、多くの生徒は前半で息の大半を使ってしまい、後半は息切れで聞こえにくくなりがちだ。これに対して英米人が読むと、文末の語 (parents) に強勢がつくので終わりまではっきり聞こえ、抑揚もつく。これは、英米人と日本人では呼気の量が大きく違うためである。

人間が音声を発するためには、息(空気の流れ)がなければならない。つまり息を吸い込むか、吐き出すか、空気の流れが基本になる。英語や日本語を含めての多くの言語では、音声を出すのに用いられるのは主に呼気(expiration)である。ところが、英語の子音の発音の仕組みを見てきたように、英語の発音、特に子音の発音に要求される呼気(息)の量は日本語に比べた場合圧倒的に多いのである。

英語は横隔膜呼吸つまり腹式呼吸で発声される。日本語は、浅い呼吸の胸式呼吸で発声されるため呼気量が少なく、日本人が英語を話すと声がか細く、相手に伝わらないことになる。もちろん、日本人でも男子は浅い腹式呼吸を行っているといわれるが、英語を話すには呼気の量が多い腹式呼吸が必要なのである。

腹式呼吸(Abdominal breathing)とは、背筋を伸ばして、体から力を抜き自然な姿勢で、お腹に手を当てて息をはき続けると、腹がふくらんでくるのがわかる。そういう発声法をいう。これは演劇部の生徒が屋外で「ア、エ、イ、ウ、エ、オ、ア、オ」と合唱しているのと同じことである。また、カラオケ

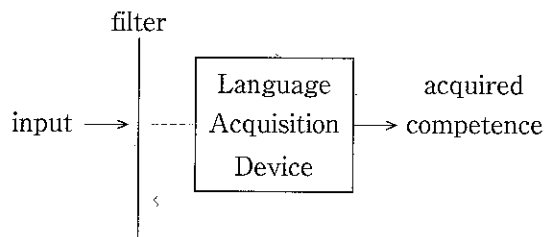
などで、発声の練習をするのと同じである。腹式呼吸ができるようになると、呼気が十分に出せるようになり、英語の発音はグッと楽になる。つまり、英語の母音を発音しても、よく通るようになり、強い呼気を必要とする子音も発音しやすくなる。従来の英語教育では、単に唇の形や、舌の位置などを説明するだけの指導に終わり、音(呼吸)抜きの発音指導が行われてきた恐れがある。中津燎子氏が「英語は、腹式呼吸で発声し、発音する」という認識から『なんで英語やるの?』を昭和49年に著した。これは音抜きの日本の英語教育の盲点をついていて大きな反響を及ぼしたが、それから二十数年経った現在、英語の音声指導はまだまだ不十分に思える。

3. 2 母音の干渉

日本人が英語を学ぶ際に、障害となるのは母語の干渉だといわれる。これは新しい技術(英語)を学ぶとき、既習の技術(日本語の知識)を利用することになるが、いつまでもそれに頼ろうとする。それがかえって外国語の習得に大きな邪魔になることである。音声面について考えてみると、例えば、日本語は母音に子音が結びつくが、英語は子音だけで使われたり、子音+子音で発音されるので、日本人は Smith を「スミス」とか、また、think は「シンク」というように発音してしまう。これは日本語にない音をすでに修得している日本語の発音体系に干渉されてしまうためである。このように、日本人の英語学習では、英語の音声の大部分が日本語で代用されてきたきらいがある。実際、このレポートで、英語の母音と子音の多くが日本語の音に置き換えられがちなのがわかったが、これは、日本人の英語学習には母語の干渉が強いことを示している。「外国語の音は、母国語の音とは全く別のものである」と、中津燎子氏が指摘するように、新しいことばの「音」を

修得するのは、容易なことではない。英語の先生でも、発音や聴き取りに悩む人が少なくない。

ここで、外国語学習は学習者の心理にかなり左右される、ということがいろんな研究で明らかになっている。例えば、アメリカの言語学者クラッシュェン(Stephen Krashen)等は、affective filter(心理フィルター)という概念を第二言語習得の理論に導入し、次のような図¹⁾で説明した。



新しい言語の音を聞いても、緊張していると心理的な抵抗ができて(フィルターが高くなって)学習が成功しない(言語能力に吸収されない)。逆に、理想的な学習者は緊張しないので、フィルターが低くインプットがどんどん入り学習が成功する(上達する)というのである。つまり、外国語の学習には、動機づけ、積極さと自信、少ない不安などが大きな影響力を持つというのである。このような要因を備えた学習者が、インプットに対してオープンな態度で学習すると、フィルターが低くなり、学習効果が上がる。私たちは英語の学習で、どんどんインプットをして自分自身の発音を常にチェックすること、そして間違いを恐れず人前で発話することが必要である。こうすることによって、私たちは自分の発音を修正し、聴き取りや発話能力を高めることになるのである。

3.3 今後の課題

最近の英語教育では、Communication能力が重視され、音声指導も、個々の音の指導から入るBottom-Up式から、大意の聞き取りから徐々に細かい音等の指導に入るTop-Down式へと指向が変化している。発音や文法も、以前ほど正確さを要求されないようだ。しかし基本的な英語の音については、正確な発音と聞き分ける力は必要である。

先生が生徒にRepeat after me.とかRepeat after the tape.とよく言うが、先生自身が個々の音の特質や発声方法を正しく知らないと、生徒たちは日本語の音のイメージで発音してしまい、英語の音が

身に付かない。

最近、ALTの数が増加した。ALTの存在は、Team-teaching等を通して生徒の英語への動機付けの面で好ましい。しかし、ALTの指導で生徒の発音指導は安心だとするのは楽観的すぎる。一般的に、ALTに生徒の発音の矯正はできるか、という点である。

稲垣²⁾によれば、「一般にnative speakersは、英語の正しい音を示し、発音された音が正しいか否かの判断はできますが、発音矯正はできません。生徒の音が正しくないとわかっていても、専門的な知識がなければ、どこが悪いのか問題の所在がつかめないからです」。

このような意見は、日頃Team-teachingを行っていても肯けるところが多い。結局のところ、ALTの助けを借りるとしても、音声指導は、私たち英語教師自身が主導的にしなければならないということである。

発音が悪いと通じない、聞き取りが悪いと話せない、は多くの人が経験することだが、「正しく発音できないと聞き取れない」のである。日本人にとってのリスニングの問題点は、渡部(1979)³⁾によれば、①音素の識別ができない、②音声変化(同化・連結など)についていけない、③話す速度についていけない、④英語のリズムにのれない、と挙げられている。①に関して、識別困難な音といえば、v-b, f-h, s-θ, z-ð, r-l, æ-ʌ, a-ʌほか、多くある。音素の識別は英語の聞き取りに必須なのである。しかし、英語の先生でも、[a] [ə] [æ] [ʌ]等の母音の区別や、子音の区別ができない人が少なくない。若い先生では、積極的に英語を話そうとする人が増えてはいるが、基本的な英語の音の発声、聞き分けができない人が多い。これは大学での英語教育の内容が以前とほとんど変わっていないからである。多くのクラスは読解クラスであり、英会話クラスがあるといっても、初級会話程度である。特に若い先生は研修会に参加するなど自己研修に励んでほしい。授業だけ、あるいは教材予習だけに終われば、その人の英語はいわゆる使えない学校英語に留まってしまうのである。昨今、学校英語に対する批判が強い。例えば、荒木⁴⁾によれば、「一部の英語教師を除いては、先生がまともな発音ができないのだから、その先生に習った生徒たちに正しい発音ができるわけがない。結果として日本人の大部分が英米人に通ずる発音がまる

できないと言うことになる」。

こういった批判に対しては、私たち英語教師は英語の音に sensitivity を持ち自分自身の発音を正確にし、自信を持って生徒たちに音声指導ができるようにする必要がある。

4. おわりに

このレポートで音声学的に英語を見直して、英語の音が日本語の音と異なるだけでなく、発声法も大きく違うということを再認識した。また、なぜ多くの日本人が英語を聞けない、話せないのか、という点についても、母語の影響を受けやすい、等の理由から理解を深められた。私たちの周りには日本語化された英語が氾濫している。英語を教える立場にある私たちは、英語の音声は異文化であるという認識を持ち、音声教育を実践したいものである。

注

- 1) Stephen D. Krashen. *The Natural Approach*. Alemany Press. New Jersey, 38-39.
- 2) 稲垣明子 (1987) 『歌とリズムでフォニックス』 国土社, 24.
- 3) 渡部和行 (1979) 「「聞きとれない」とはどういうことか」『英語教育』大修館書店, 2月号, 6-8.
- 4) 荒木博之 (1995) 『日本語が見えると英語も見える』中公新書, 126.

参考文献

- 川越いつえ (1999) 『英語の音声を科学する』大修館書店。
- 竹林滋他『初級英語音声学』大修館。
- 清水克正『英語音声学 理論と学習』勁草書房。
- 竹蓋幸生 (1997) 『日本人英語の科学』研究社。
- 長澤邦紘 (1999) 『教師のための英語発音』開文社出版。
- 中津療子 (1984) 『なんで英語やるの』文春文庫。——『呼吸と音とくちびると』午夢館。
- 黒川省三 (1978) 『アメリカからみた日本人の英語』ジャパン タイムズ。
- 吉田研作 (1990) 『英語リスニング上達の方法』ジャパン タイムズ。
- 吉田一衛 (1993) 『英語のリスニング』大修館書店。
- 藤本敏之『英語と日本語とその文化』近代文芸社。
- 小野昭一『英語音声の基礎』リーベル出版。
- 鳥飼玖美子『異文化をこえる英語』丸善。
- 本田正文『バイカルチャルになれる人・なれない人』丸善。
- 佐々木伸右『アメリカ英語・再入門』丸善。
- 『英語教育』大修館書店, 10月号 (2000) 特集: 英語の基礎力としてのリスニング。
- The English Journal*. アルク, 12月号 (1985) 特集: リスニング上達の秘訣。
- The English Journal*. アルク, 4月号 (1980) 特集: なぜ聞きとれないかがわかった! ヒアリング力を飛躍的に伸ばす決め手はこれだ。

(和歌山県立御坊商工高等学校教諭)